

生き生き消防団

岡山県和気町消防団 第4分団

第21回全国消防操法大会を終えて

岡山県和気郡和気町消防団



▲競技前、整列している選手達



▲操法大会の競技

1 はじめに

和気町は岡山県の東部にあり、人口約16,200人、世帯数約6,200世帯、総面積144.23km²で山林・原野が総面積の85%を占め、吉井川が南北に、金剛川・初瀬川が東西に流れており、清流と緑に彩られている中山間地のまちです。

因みに、摂津・河内の大規模な治水工事などの数々の業績を残した平安時代に活躍した「和気清麻呂公」の生誕の地として有名です。

毎年、ゴールデンウィークには、「藤まつり」が開催されます。藤の種類の数では日本一で

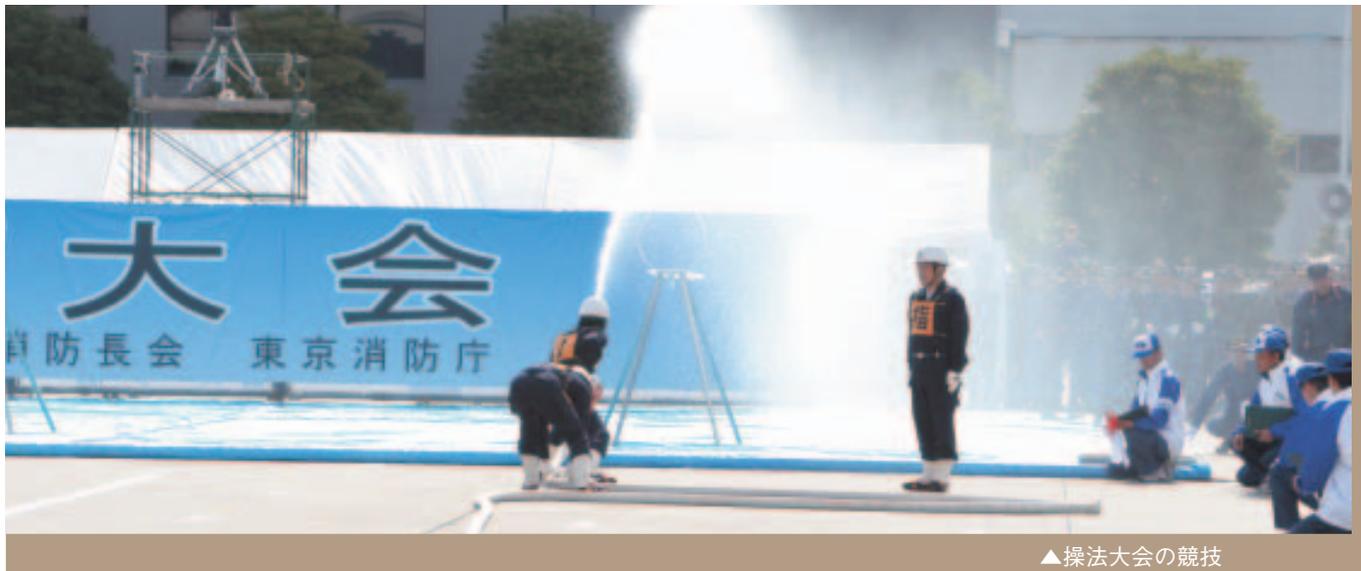
す。また、当町の夏の風物詩となっている壮大な炎の祭典として、毎年8月16日夜空に「和」の文字が浮かび上がる「和文字焼きまつり」が開催され、大変多くの方で賑わっています。

この祭りは、京都の「大文字焼き」の火と同時に点火されます。

一方、町では高齢化率が30%を超え、これまでのように行政区だけでは取り組めなくなったことを小学校区等の地区で共に助け合いながら地域をつくるため、「元気・やる気・日本一」を標語に助け合いのまちづくりを目指しています。



▲藤公園のライトアップ



▲操法大会の競技

2 消防団の紹介

和気町消防団は、平成18年3月1日に和気町と佐伯町の2町の合併と同時に新たなスタートをきりました。現在、1本部・8分団体制で5つの機動部と49の部に団長以下693名で組織され、日頃から住民の安全・安心を守るため地域防災の一翼を担っています。

消防団活動については、毎月開催される幹部会で団活動の方針を決定するとともに、各分団の情報交換等を行い、町の防災訓練への参加や火災予防運動での町内巡回、年末夜警、各種祭りの警備などはもちろん、消防団員減少を喫緊

の課題ととらえ次世代の地域防災を担う小中学生に団活動を知ってもらうため学校での講座の開催など地域に密着した活動を行っています。

中でも所属している第4分団は、夏祭り「和文字焼き」が地元で開催されることから、火災防止のため、あらかじめ放水し準備を整え、祭りの終了まで山上で有事に備えています。

3 操法大会までの経緯

1年前の県大会で代表チームの選考が行われることになっております。県大会は、昨年で第55回を迎えました。

そこで、我が町は、平成19年5月に開催された県大会で優勝し、平成20年10月12日開催された第21回全国操法大会へのキップを手に入れたのです。このたびの大会出場は、合併後新和気町として初めての出場でした。

この起こりは、合併前の4年前の初出場の横浜国際スタジアムから始まりました。

4年前の大会を思い起こせば、大会が近づくとつれてホースが伸びなくなり、チームの雰囲気も苛立つようになっていき、本来の力を発揮することができず、悔しい思いをしたものです。

岡山県の大会では、水を出さないカラ操法なので、全国大会では送水技術の習得ばかりに気をとられ1番員から4番員までの消防団員のメンタル面まで配慮することができなかつたのが原因でした。

その反省を生かして送水技術に関しては、近隣の強豪県の大会を見学したり、その場で合同練習を行い、勉強させていただきました。また、メーカーの方に相談して配管や圧力センサー、スロットルポジションセンサーを取り付けて、パソコンで送水状態をグラフ化し解析したりもしました。

一方、メンタル面に関しては、有名な指導者の著書やテレビを見ていて感じたことをメモしておく等、メンタルノートを作って指導のやり方に成果を上げています。

私たちのチームの特徴として「楽しむ」という考え方があります。指導者の考え方を押しつけるのではなく、みんなで常に新しいことを考えて自分たちで試して評価し合うこと。それが「楽しむ」につながり、厳しい練習にも耐えることができると考えています。

4 エピソード

「出場順位、岡山県第1コース1番」。このことを消防関係者の方から聞いたとき、私は、落ち込みました。それだけは避けたい順番でした。しかし、4年間頑張ってきたことを全部出しき

う「さあ、来い」と開き直ることができました。

大会当日の朝、「集まれ」の練習をしたとき、1番員は何回やってもうまくできませんでした。私は、彼の耳もとで「君には期待していないから、好きなようにやりなさい」と言って笑っていました。プレッシャーがかかった場面で、そう言うことができました。ノー天気な1番員は「任してください」とガッツポーズ。全員、大笑いでした。

4年前、出場直前に「気持ちが悪い」と言ってきた2番員を「チッ」と言って突き放してしまったあの時の自分を思い出し、「ここまで仕上げる事ができたなあ」と、淡々と準備する仲間達を見ていました。

完璧な状態で送り出したつもりでしたが、やはり1番クジは緊張するらしく、初陣の指揮者は、足が震えて仕方なかったそうです。語り継がれるように、「全国大会には、魔物が住んでいるんだなあ」と感じました。

5 終わりに

消防団員として、操法訓練を通して養うことができた感謝の気持ちや仲間づくりの楽しさを今後に活かして、生き活きとした思いやりのある消防団を作っていきたいと考えています。

この度の優勝を機に、地元地域住民が更に安全・安心に暮らせる町づくりを目指してゆく所存でございます。



▲優勝後の記念撮影